



関西学院大学リポジトリ

Kwansei Gakuin University Repository

<フォーラム> ドイツにおいて宗教改革記念日はどのように祝われたか : ドイツ福音主義教会の動きを中心に

著者	加納 和寛
雑誌名	関西学院大学キリスト教と文化研究
号	19
ページ	75-82
発行年	2018-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10236/00026994

ドイツにおいて宗教改革記念日は どのように祝われたか

——ドイツ福音主義教会の動きを中心に——

加 納 和 寛

はじめに

宗教改革500周年をめぐる動きは多様かつ複雑を極めます。そのすべてを紹介する力量は私にはございませんので、必然的に私の考えの及ぶ範囲ということになります。残念ながら2017年に渡独する機会はありませんでしたので、現地での体験ではなく、おもに資料に基づく紹介に終始しますが、ご容赦いただきたいと思います。今回は特にドイツのプロテスタント教会が2017年の宗教改革記念日をどのように迎えたのかということに焦点を合わせてみたいと思います。

1. 2017年に向けて：準備段階

①10年間の準備期間

ドイツの伝統的なプロテスタント（福音主義）教会は地域ごとに分立しており、2017年現在20を数えます。その多くは「中部ドイツ福音主義教会」や「ベルリン・ブランデンブルク・シュレージッシュ・オーバーラウジッツ福音主義教会」といったように、地名や地域名を冠した教会名を名乗っています。それらの全国組織である「ドイツ福音主義教会（以下EKD：エーカーデー）」は宗教改革500周年の推進機構を2007年3月に設置しました。当時のEKD常議員会議長、すなわち事実上ドイツのプロテスタント教会を代表する立場にあったヴォルフガンク・フーバー監督が責任者に就任しました。構成員にはドイツ合同ルーテ

ル教会（VELKD）議長、ドイツ合同福音主義教会（UEK）議長などの教会関係者のほか、ドイツ連邦内務省政務官、宗教改革の地ヴィッテンベルクがあるザクセン＝アンハルト州の州首相、ヴィッテンベルク市長なども名を連ねました。同時に実行委員会も組織され、実務に当たることとされました。同推進機構および委員会の目的は「宗教改革500周年を国内向けおよび国際的に教會的かつオープンであり、学問的かつ文化的な行事として提供すること」とされました。

②共通ロゴの公開

EKDは2008年から宗教改革500周年の共通ロゴを公開しました。ライセンスに同意し、非商用であれば広く使用可能であるとしていました。ルターの肖像は最もよく知られているルーカス・クラナッハ（父）による1528年のものをベースにしています。なお、コピーライトは「Luther 2017」と表記することとなっています。「2017」は古典的なフォント、「LUTHER」および「500 JAHRE REFORMATION」は現代的なフォントを用いることによって、伝統を受け継ぎつつ未来を指向する姿勢を表現するとしています。ちなみに文言は各国語バージョンが作成され、日本語のものも広く利用されています。



③政府・自治体の動き

ルターゆかりのチューリッゲン州、ザクセン＝アンハルト州などでは州政府が全面的に後押しし、記念行事や観光案内などが行われています。ヴィッテンベルクにはザクセン＝アンハルト州によって事務所が設置され、あらゆる関連情報が一元管理される体制が整えられました（<http://www.luther2017.de/>）。この活動はヘッセン州、ザクセン州、ザクセン＝アンハルト州、チューリッゲン州、ラインラント＝プファルツ州、ブランデンブルク州、バイエルン州教育省、文化・メディア連邦政府委員会、EKDの後援を受けています。そのほか、ルター関連

本、ルターグッズの販売などに至っては枚挙にいとまがありません。たとえば、EKDのサイトからリンクしているオンラインショップでは、90あまりのアイテムが販売されています。

2. 理念の表明

①公式文書『義認と自由』公表

- 2014年5月、EKD常議員会は『義認と自由：宗教改革500年2017』を発表しました。同文書は宗教改革500年の「祝い方」を方向付けるものとして理解されます。
- ・第4版の序文（2015年1月）において、EKD常議員会議長H・ベッドフォード＝シュトロームはこれを1934年のバルメン宣言、1962-65年の第二バチカン公会議、1999年の『義認の教理に関する共同宣言』、2013年の『争いから交わりへ』が念頭に置かれているものであると明言しました。そして2017年を「エキュメニカルな交わり」における「大いなるキリストの祭典」と表現しています。
 - ・同文書は、宗教改革以来500年の歴史を「教派分裂の挑戦を克服し、エキュメニカルに考えることを学んだ」ものであるとし、今後の課題に「宗教間対話」を据えています。
 - ・また「宗教改革の教会と神学」が対峙すべきは「非キリスト教化や無神論の挑戦」であり、学ぶべき事柄とは「男女性差による階級制度を断固取り除くこと」としています。
 - ・「聖書のみ」「恵みのみ」「信仰のみ」の3つのテーゼに関しては、これをすべてエキュメニカルの理念を支えるものであるとし、ハイデルベルク信仰問答第一問から「キリストのみ」、説教の重視および sacrament（見えるみ言葉）と義認（告げられるみ言葉）より「み言葉のみ」の5つの「のみ」のテーゼを掲げます。
 - ・結びについては次のように述べられています。「宗教改革祭2017は、それを祝うことのできる教会の中で、しかしまた社会全体においても、自由についての本質的な洞察を想起し、それを生き生きと持ち続け、同時にまた強化し刷

新することのできる機会である。こうして全世界にいるプロテスタントのキリスト者も……ローマ・カトリック教会の、そして東方正教会の信仰の兄弟姉妹たちと一緒に祝う。争いと分裂を越えて、皆お互いにイエス・キリストの福音の中に共通の土台を認識し承認することのできる、長いエキュメニカルな対話に基づく確信をもって祝う」。

②カトリックとの協働

2016年1月、元・ローマ教皇庁キリスト教一致推進評議会議長であるヴァルター・カスパー枢機卿はベルリンでルターに関する講演を行いました。その中で彼はルターを「かなりの数の人々にとって、プロテスタント、カトリック共通の教会博士」と呼び、「2017年、わたしたちは、かつて1517年に分裂への道を歩き始めた時のようではなく、一致への道を歩んでいる。勇気と忍耐をもつならば、最後にはわたしたちは失望に終わらないであろう。わたしたちは目をこすり、神の霊が、わたしたちの考えていたのとは全く違ったように成し遂げられたことを見て感謝するであろう。このようなエキュメニカルな展望において、2017年はプロテスタントのキリスト者とカトリック信者ともに一つのチャンスが訪れている」としています。

・2016年10月31日、スウェーデンのルンド大聖堂において、カトリック教会とルーテル世界連盟による記念合同礼拝が行われました。相互聖餐に関しては具体的前進はなかったが、共同宣言においては「私たちの共同体では多くの成員が、完全な一致の具体的な表現として、一つの食卓で聖餐にあずかることを切望している」と述べられ、「キリストの体に残っているこの傷が癒やされること」を願い、「これが私たちの教会一致への努力の目標であり、この点での前進を私たちは望み、またこのために、神学的対話への私たちの決意を新たにするものである」とのメッセージがフランシスコ教皇およびルーテル世界連盟議長ムニブ・ヨウナン監督より発表されました。なお、フランシスコ教皇はそれ以前より「宗教改革500年を祝う上で最も適切な方法は、合同の祈りを共にし、貧しい人を助け、正義を促進するために共に働く決意を新たに

すること」だと強調しています。

③プロテスタントにおける協働

2017年7月5日、ヴィッテンベルクの聖マリア教会において、ルーテル世界連盟と改革派教会世界コミュニオンは共同宣言に署名しました。同宣言は「ともに感謝し、ともに喜ぶ」「ともに礼拝をささげる」「ともに神の呼びかけに聞く」などの7ヶ条からなり、教会一致を推進する内容となっています。同時に改革派は『義認の教理に関する共同宣言』にも署名し、すでに署名しているルター派、カトリック、メソジスト（2006年）の代表者が見守りました。

・ちなみに、ヨーロッパのルター派と改革派の多くは1973年に締結された『ロイエンベルク一致協約』において、長年両者を隔ててきた聖餐論その他に関して一致に至ったとしており、EKDの『義認と自由』も改革派との関係について『ロイエンベルク一致協約』を踏まえています。

さて、2016-2017年におけるEKD主催・共催のおもな行事は次のとおりです。

- ・ (2015年) 10月31日～ ポップ・オラトリオ「ルター」ドイツ全土でツアー開始
- ・ 2016年 10月30日 『ルター聖書2017年版』発売
- 10月31日 ルンドとベルリンでカトリック・ルター派合同礼拝
- ・ 2017年 3月11日 ヒルデスハイムで「敵対してきた歴史を悔い、その罪を告白する」合同礼拝。ベッドフォード＝シュトローム議長、ドイツ司教協議会議長マルクス枢機卿が共同司式、ガウク大統領が出席。
- 5月24-28日 キルヘンターク（全ドイツ信徒大会）開催。
ヴィッテンベルクなど8都市が会場となり、のべ20万人が参加。ヴィッテンベルクでの閉会礼拝には12万人が参加。
- 7月 5日 改革派との共同宣言
- 10月31日 ヴィッテンベルクほかで記念礼拝。

ただし、批判がまったくなかったわけではありません。ルターがユダヤ人に対して批判的な態度を持っていたことはよく知られています。1523年の時点で書かれた『イエス・キリストはユダヤ人として生まれたことについて』において、ルターは宗教改革によって「正しく」説かれた福音をユダヤ人たちが受け入れ、改宗してくれるだろうという楽観的な見方を示しています。しかし1543年の著作『ユダヤ人とそのいつわりについて』では、ユダヤ人の追放やシナゴグの破壊を提唱しています。ナチスがこのルターの言説をホロコーストに利用したのは事実です。一方で、ルターの反ユダヤ主義的主張は19世紀頃までほとんど見向きもされなかったとする見解もあります。

EKDは1975-2000年にかけてキリスト教徒とユダヤ教徒との関係についての検討を行い、その結果「ユダヤ教徒は依然として『神の民』であり、改宗を勧める対象ではない」との見解を示しています。2015年11月のEKD総会において、宗教改革500年はルターの反ユダヤ主義的主張と一切関わりのないものにとされました。ドイツの全国紙「ツァイト」や「ヴェルト」は一時的にこの問題を取り上げたものの、当事者であるユダヤ人団体は宗教改革500年に関しておおむね沈黙する姿勢をとっています。

3. 2017年10月31日：宗教改革500年記念礼拝

宗教改革500年諸行事の頂点は、宗教改革記念日礼拝であったと言えます。10月31日にはドイツ各地で無数の記念礼拝が行われたのですが、最も注目された礼拝は、ルターゆかりのヴィッテンベルク城教会で行われた礼拝です。EKDのベッドフォード＝シュトローム議長が説教をつとめ、ドイツのシュタインマイヤー大統領、メルケル首相らが出席しました。入堂から退堂までほぼ1時間の長さだったこの礼拝のおもな内容は次のとおりです。

- ・入堂：「神はわが砦」（EG362、讃美歌21-377）
- ・挨拶：イルゼ・ユンカーマン監督（中部ドイツ福音主義教会）

- ・95ヶ条の提題紹介：クリスティアン・ボイヒェル教区長（ヴィッテンベルク教区）
- ・95ヶ条の提題の一部の朗読：デーヴィト・シュトリーズフ（俳優）
- ・福音書朗読（英語）：マルゴット・ケースマン牧師（元EKD議長、宗教改革担当）
- ・合唱「聖霊はわれらの弱きを助けたもう」（バッハ、BWV 226）：
ライプツィヒ・聖トーマス教会聖歌隊
- ・説教：ベッドフォード＝シュトローム監督（EKD議長）
- ・聖書贈呈：ケースマン牧師からヴィッテンベルクのギムナジウム女子生徒①
へ
- ・95ヶ条の提題（レプリカ）贈呈：
ボイヒェル教区長からオラフ・フィクセ・トヴェイト牧師（世界教会協議会
総幹事）へ
- ・「和解の十字架」贈呈：ベッドフォード＝シュトローム監督からマルクス枢機
卿（ドイツ・カトリック司教協議会会長）およびシュタインマイアー大統領（ド
イツ連邦共和国）へ
- ・連祷：ヴィッテンベルクのギムナジウム女子生徒②、ボイヒェル教区長、ユンカー
マン監督、トヴェイト牧師、マティアス・ポール氏（ヴィッテンベルク地区
信徒代表）
- ・祝祷：ベッドフォード＝シュトローム監督
- ・退堂：「神はわが砦」オルガン編曲版

全体的に落ち着いた雰囲気終始しており、華美なパフォーマンスは一切ありませんでした。強いて言うならば、俳優のデーヴィト・シュトリーズフ氏がジャケットにノーネクタイ姿で95ヶ条の提題の一部を朗読したことでしょうか。実はシュトリーズフ氏は、2017年2月22日にドイツのテレビで放映されたドラマ「カタリーナ・ルター」（ルターの連れ合いであるカタリーナが主人公のドラマ）で、マルティン・ルターを演じた俳優なのです。つまり、ドイツ人が見ると「ルターが95ヶ条の提題を読み上げている」と感じるわけです。ドイツらしい演出と言えるでしょうか。

ちなみにメルケル首相は礼拝では特に役割はなく、17時からヴィッテンベルク市民ホールで行われた記念フェスティバルで演説しました。

4. まとめ

宗教改革記念日を前にして、ベッドフォード＝シュトローム議長のインタビューがEKDのサイトに掲載されました。同監督は宗教改革500年が「平和かつ開かれた」祝いの年になったことをまず感謝し、また諸行事が決して「ナイーヴな熱狂」ではなく、ナショナリズムや反カトリック主義による問題が生じなかったことは成功であるとししました。そしてEKDが目指すのは、95ヶ条の提題で表現されたルターによる問題提起をエキュメニカルかつ国際的に共有し、次世代へと受け渡すことであると改めて強調しました。一方で、カトリックとは見解の相違がなおありつつも、相互陪餐への道が具体的に進みつつあるともしています。

私見ですが、女性教職者をめぐる議論については今回はカトリック、プロテスタントの間で進展はありませんでした。ルターの破門も解除されませんでしたし、相互陪餐についても具体的な歩み寄りは見られませんでした。そういった意味では、宗教改革500年はカトリック、プロテスタント両教会にとって、制度上あるいは組織上の大転換になったとは言えないかもしれません。しかし今回、宗教改革に対してカトリック教会との協働が積極的に行われたことは驚くべき変化であったと言えるでしょう。その意味では、未解決の課題がなお多々ありつつも、一致を目指す未来的な周期的行事として、宗教改革500年は周到な準備の上で実行されたと言えるのではないかと思います。